江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

編集長 昆　吉則

T家の〝大欲は無欲に似たり〟

結婚式に呼ばれた。新郎F君の父親Kさん、祖父のWさんは古くからの読者。このT家は僕にとって因縁浅からぬ。僕の話を聞いたばかりに損をさせてきたかもしれない一家なのである。今回、結婚式で祝辞を述べろというのであった。

Wさんとの最初の出会いは今から20年以上前、98年に行なった北海道型の機械化体系による畑作野菜経営を目指そうという実演研修会だった。北海道ニプロにお願いして同社が開発し、クボタが販売していたピックアップハーベスターを提供してもらい、茨城県結城市内の畑に植えたタマネギの収穫実演も行なった。農業経営者だけでなく外食や流通・加工業者も参加した。需要企業が生産者との連携をさらに深めていくことの必要性を語り、イベントも「経営実験プロジェクト会議」と銘打っていた。

検討会にKさんと一緒に参加したWさんが「実はタマネギを作ってみたのだが、まだ売り先がない」と言う。それじゃダメじゃないかと僕は言ったが、そんなWさんのタマネギ作りには理由があったのだ。

Wさんは地域の土地改良区の専従役員となり、その年にKさんに経営移譲をしていた。土地改良区のリーダーとなったWさんがT家にあてがったのはほとんどが用排水分離のできていない排水の悪い水田ばかりだった。皆を説得してまわった土地改良で自分が条件の良い場所を取ってしまうのは良くないと考えたからだ。タマネギの試作は、そんな水田での転作として野菜作を普及所や農協にも呼びかけて実施したものだ。

それで参加した研修会であったが、排水の悪さはいかんともしがたく出来は散々だった。

作物を作るなら売り先を決めてからじゃないとダメだといった手前、僕はカルビーを紹介して次の年からジャガイモの契約栽培をすることになった。数年に一度はジャガイモを作る水田に水が入り、水耕栽培でジャガイモを作っていると笑えぬ冗談を言ったりしていた。

それでも、タマネギもジャガイモも生産を続けた。T家はくじけることを知らず、機械の力で排水を良くする努力を続けた。Kさんが就農した時から肉牛肥育も始めていた。さらに、家族で直売所をやるなど働くことを惜しまない。それに様々な村役や農家の研究会の会長をするなど頼まれ仕事を引き受けてきた。Wさんは「とにかく稼げ（働け）」というのが口癖だ。

それで10年、20年が経った。F君の結婚式の後、T家に寄って地元の人たちから話を聞いた。

約1千町歩の農地があるというT家の住む町で後継者のいる農家は10戸くらいしかない。後継者といえども60代も含めてだ。それだけに頼まれる農地は幾らでもある。T家は数町歩の水田を買ったそうだ。ある人は話していた。

「買わなくても借りられる農地なのに買ってやるのがT家なんだよ」

〝大欲は無欲に似たり〟という言葉がある。

まさにそれはT家のことだと思う。僕の言うことを信じて損することもあるのを知りつつ、村に、そして自らの経営にとって必要だと思うことに果敢にチャレンジする。失敗にもくじけず笑って未来を見つめ続け、とにかく稼ぎ続ける。であればこそ着実に経営レベルを高め、であればこそ村に戻すこともできる。

F君の時代にはさらに大きな変化が進むだろう。でも、T家に受け継がれるこの理念を忘れないでほしい。